【小特集：エレクトロニクス・IT ビジネスのいま（情勢分析研究会報告）】
【報告】

エレクトロニクス・IT ビジネスのいま（趣旨説明）

大橋 英夫

2016年度中国経済経営学会情勢分析研究会（第1回）が下記の通り開催された。ここでは、その概要を報告し、講演記録を掲載することとする。

日 時：2017年7月29日（土）13：30～16：30

場 所：専修大学神田キャンパス

テーマ：「エレクトロニクス・IT ビジネスのいま」

講 師：伊藤均氏（富士通株式会社 政策渉外室 シニアエキスパート [中国担当]）

「中国ITビジネスと富士通の実践」

曾田忠典氏（Kay Bright Ltd [桂輝有限公司] 総経理）

「香港型委託加工の変遷とケイブライトの中国ビジネス展開」

参加者：15名

改革開放期を通して、エレクトロニクス・IT産業は中国の産業発展においてきわめて重要な役割を果たしてきた。そして、その牽引車が日系企業をはじめとする外資系企業であったことは、周知の通りである。

改革開放直後、経済特区・深圳には当時の日本を代表する家電・電子機器メーカーが相次いで進出した。そのひとつの華強北には、その後、山寨携帯電話メーカーが乱立し、巨大な電子部品市場が形成されて、いまでは「創客空間」をベースにして、野心的なメーカーが相次いで誕

生している。

エレクトロニクス・IT産業そのものの急速な発展、また業態の変化に伴い、中国におけるエレクトロニクス・ITビジネスも大きな変化を遂げてきた。もともとは外資による電子機器のハードウェアの生産から始まった中国のエレクトロニクス・IT産業であるが、その後は地場産業・企業の成長が続き、ハードウェア生産はほぼ地場産業・企業により担われるようになった。外資企業はといえば、地場産業・企業に生産委託を進め、ICT、ビッグデータ、クラウド、IoT、AI、ソリューションへと事業内容をさらに高度化させている。一方、中国では、エレクトロニクス・IT産業の資源と経験を土台にした巨大プラットフォーム産業が成長している。

今年度の情勢分析研究会では、ICT分野において長らく中国ビジネスに携わってこられたベテラン・ビジネスマン、そして若くして電子機器製造サービス（EMS）に参入された経営者をお招きし、「エレクトロニクス・ITビジネスのいま」を考えてみたいと思う。

なお、講演記録の作成にあたっては専修大学・李春霞氏のご助力を頂いた。謝して記しておきたい。

（おおはし ひでお・専修大学）